



月刊部活新聞

2014年10月 第87号

編集・発行 Unit

部活と顧問の両立

9月下旬にある記事が目につきました。

それは大阪市と市教育委員会が市立中学校における運動部系部活の指導について、民間委託をする方向で検討を始めたというものでした。

顧問教員の負担軽減が主な目的とみられますが、これは生徒にとつてもいいことなのではないでしょうか。

教員の本分

顧問教員として運動部への関わりは、単なる割り振りや担当している場合や、自ら進んで指導をしている場合など様々な形があります。

単なる割り振りや、運動経験もあまりない教員の場合、放課後や長期休暇の時間的拘束、生徒への技術指導不足など教員の問題だけではなく、

生徒もきちんとした指導を受けられないことになってしまいました。

これは双方にとつていいことではなく、それを改善できることは非常にいい方向ではないかと思いません。

そもそも教員の本分は各教科における生徒の理解を深め、より専門的な指導を展開することではないかと思いません。もちろん年代によつては人格形成にも大きく関わってくるため、各教科だけを指導していればいいというものではありません。

そのような専門知識は常に新しい考え方も出てきます。それらがすべて正しいというわけではありませんが、それを踏まえて知識を更新してゆくことは専門職としては最低限行つては最低限行つてゆかなければいけないことです。

専門職は私たちもそうですが、一度資格を取ったらそれで終わりではなく、それが始まりとなり、学び続けることで専門職として自立してゆくのではないのでしょうか。

さて問題は高校や大学で運動の経験があり、その経験していた種目の顧問として活動する場合です。

指導ができる教員

現在のスポーツ界の構造から考えても、各競技におけるそれら指導者の功績は非常に大きいと思えます。

しかし教員あるいは技術指導の専門家としてみるとどうでしょう。もちろん両方に秀でている方もいらっしゃるでしょうが、全員がそうとは限りません。

継続的な指導も公立学校であ

れば転属もあるためできません。競技者の立場からすると必ずしもいい環境とはいえないかもしれません。

また部活を指導しているということは、運動経験のない指導者同様、本来の専門性である教育に関する専門知識を習得する時間がないということになってしまいます。

はたしてそれは教育の専門職として正しい姿なのでしょうか。

専門家の指導

そのように考えると、教員は各教科における指導の専門性を高め、ひいては学力や体力の向上に努めるのが仕事。部活でより技術や戦術を専門的に指導してゆくのは、各都市町村体育協会に加盟している競技団体の仕事、体力面を強化するのは我々フィジカルコーチの仕事とするのが、教員にとつても、

生徒にとつては一番いいのではないのでしょうか。

どうしても競技の指導をした場合、中途半端に教員をするよりも、辞めて指導者として活動をしてほしいのではないのでしょうか。専門職は腰掛けで出来る仕事ではありません。

各競技団体が指導することにより、より長期的視野において一貫指導ができるということ、最終的にはその競技団体の底上げにつながるのではないかと思いません。

Unit 代表 澤野 博 (さわの ひろし)

日本体育大学卒。社会人経験を経て欧州へ留学。乳酸を中心としてトレーニングを幅広く学ぶ。帰国後、部品となって競技者を支えるという意味で「Unit」を設立。競技種目、競技レベルを問わずトレーニング指導を中心に活動。医療系国家資格の臨床検査技師の資格を持つ異色のフィジカルコーチ。NSCA CSCS、JADA DCO など保有。

ご意見、ご要望、仕事依頼、お問い合わせは下記まで。

0422-34-5055 (Fax 兼用)、090-1999-2845 または sawano@team-unit.com